

C・S・パースの実在論——序説

浅輪 幸夫

△はじめに▽

西洋の哲学通史をどれか繙いてみたことのある人は、中世においてスコラ学者たちが概念、類、種、一般性、共通性等といった普遍的なもの（普遍者）の実在性をめぐり激しい論争をくり広げたことをきくと記憶しているはずである。通常、普遍者論争と呼ばれるこの論戦において、スコラ学者たちは普遍者は実在するか否か、実在するとすればどのようにしてか、といった問題にたいし幾種類かの解答を見つけ出した。一般の見方によれば、それらの解答として有力な学説は大体四つに区別される。（大まかに成立年代順に並べれば）プラトン主義的実在論、唯名論、概念論、穩健な実在論といわれる諸説がそれである。しかし、そうしたことはともかくとして、西洋哲学史を通読したとき、この普遍者論争のその後の経過について多少とも疑問を感じ、不思議に思った人も少なくないのではなからうか。わたしのいわんとする疑問をひと口でいうところである。あれほど激烈であった（といわれる）普遍者論争は近代においてどうなってしまったのか。その論争の熱気がどうしてあれほど急速に冷却してしまったのであろうか。

思想史家たちはそれになりたいし一応もっともらしい説明を与えてくれている。一三世紀のスコラ学の試みに後続世代が希望を見出せなくなったとか、世俗化に伴う不信仰の時代を迎えたとか、スコラ学の論理的瑣末さ、煩雑さに人

びとが疲労したとか等といわれる。なかでも最も有力な説明は、新興の近代科学とオッカム主義との原理的類縁性あるいは無矛盾性を指摘し、近代における唯名論の勝利を歴史的必然だと説くやり方である。近代に成立した科学はそれ自体本質的に唯名論的である。いいかえれば、科学は唯名論という形而上学の基盤の上のみ成立する認識方法である。科学が世界や自然の真のあり方を正しく認識、理解する最高最善の最も効果的方法である以上、あるいはそうはいわないまでも、近代科学の成功は歴然たる事実である以上それを支える唯名論の真理も疑う余地はないのである。したがってまた、中世の哲学者たちの頭を悩ました普遍者論争が再発する余地もまたまったくないのである。

近・現代人の多くもこうした見解に基本的には同意してきたように見受けられる。実際彼らにとり普遍者論争なるものは遠い昔の出来事であり、思想史（哲学史）の地平の遙か彼方に埋没したひとつのエピソードにすぎなかった。その論戦の争点が理論的に徹底して突き詰められたうえで決着がつけられたかどうかはともかくとして、オッカムの学説が勝利を収め、唯名論が真理となったのは紛う方なき思想史的事実である。その裁定の理由は不明瞭だが、歴史の審判が唯名論に軍配をあげたからには、われわれはそれを自明の理として是認しておけば間違いないであろう。

チャールズ・サンダース・パースはこうした一般的な理解の仕方とはまったく違った観点に立っていた。中世末期からルネッサンス期の思想界におけるオッカム主義の急速な伸長と覇権の獲得、唯名論と近代科学との堅固な結合を歴史的事実としては認めながらも、パースは中世の普遍者論争で争点となった問題そのものはなお未解決のまま現代に持ち越されてきている、というように当時の思想状況を把握していた。バートランド・ラッセルはJ・K・フィブルマン著「チャールズ・S・パース哲学概論」(1946)に序文を寄せ、パースを次のように評している。

「パースの賛美者によってしか彼を知らぬ人びとは、思うに、彼がスコラ哲学に深甚の関心を寄せ、唯名論に対抗する（スコラの意味での）實在論をきわめて重視しているのを知って驚倒するであろう。現代の数多の職業哲学者にとりドゥッンス・スコトゥスは単なる人名として存在するにすぎぬが、パースはスコトゥスをウイリアム・オッカムの

批判に応戦しながら自分とは同時代に生きてる人物であるかのごとく感じ取っていた。實在論Ⅱ唯名論争をいまだ決着のつかぬ、今日なお依然として重要性を失わぬ争点と見なし立てる点でルースの考えは正しかったと思う。』⁽²⁾

△普遍者の問題▽

ルースの普遍者に関する論議を述べるに先だち、まず手始めに、中世の普遍者についての考え方を――それも、できるだけルースに関連する局面にかぎって――簡単にまとめておくことにしよう。

普遍者論争の争点はなんであつたか。われわれの知識、認識は、アリストテレスのいうように、すべて概念から成り立っている。概念は多くの異なる対象に述語づけすることが可能であるゆえ、一般的・普遍的なもの(普遍者)である。それにたいし、外界の事物は、感覚的経験によるかぎり、限定された個物であるように見える。だとすると、外界の事物はそれについてのわれわれの概念とはたして対応するのかどうか、という問題が当然生じてくるであろう。われわれの概念や知識が普遍的であり、それにたいし、存在するものはすべて特殊な個物であるとしたら、知識や概念はいかなる外的対応物もたず、単なる虚構にすぎなくなる。つまり、それらは外界を忠実に示したり、表わしたりするものではなく、したがって、真なる知識とはいえなくなる。

前述のごとく、中世においてこの問題にたいする解答は、大別すると、四つの仕方で提起された。そのひとつは、所謂プラトン主義的實在論ないしは「極端な實在論」と称される学説である。中世哲学史上最初の偉大な哲学者、ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナはその代表者である。その学説によれば、普遍的存在者がまず超越的・イデア的世界に実在している。――「自ら創造する自然」。⁽³⁾人間の精神内部の観念はその存在者(原像やイデア)と対応している。つまり「存在する事物の認識が存在する事物である」。⁽⁴⁾そしてまた、物質界の対象もその存在者を顕現している。要するに、精神の内部にも外部にも、いいかえれば、「創造されるが創造しない自然」のうちには、普遍者が存

在しているのである。したがって、精神的存在物としての一般概念は実在的であるということになる。

しかしながら、パースにとって、こうしたプラトン主義的実在論は最初から問題にならなかった。超越的存在や「普遍者」それ自体が実在する」(1.27.5)といったことはパースの問題意識とは結びつきようのない、無関係な問題であった。「實在論対唯名論の論争がプラトンのイデアと関係があるという考えは空想の所産にすぎず、そのことはいくつかの書物をちょっと調べてみればすぐ判ることである。」(2.1) 文字通りに受け取れば、この陳述は間違っているであろう。しかし、スコラ哲学に通暁していたパースのことを考えれば、その発言の主旨は事実関係とは別のところにあったと解しておくべきである。つまり、パースは自分の實在論がプラトン主義的実在論と無関係であることと、プラトン主義的実在論はもはや無意味な説として、関心の対象となりえないことを強調したかったのである。そしてこの相違はパースの實在論(「スコラ的實在論」)を理解する上で見落してはならない点である。因に言えば、パースはプラトンにたいしてほとんど共感を寄せていないように思える。この点はアリストテレスが彼の称賛的となっているのときわめて対照的である。

この極端的なプラトン主義的實在論の対極にあるのが唯名論である。この学説を初めて説いたのはヨハネス・ロスケリヌスだといわれているが、その最強最高の理論家はいうまでもなくウィリアム・オッカムである。この学説は個物の實在性だけを承認し、精神の内部にも外部にも普遍的な存在論をいっさい認めない。例えば、「観念實在論者にとって人間性ヒューマンナは一つの實在」であるのにたいし、「唯名論者にとっては、個々の人間以外に實在するものはないのである。」⁽⁶⁾ 事物はすべて個別的で特殊である。それゆえ、それを表わす観念もまた特殊である。逆にいえば、普遍的一般的事物などまったく存在しないのだから、普遍的一般的観念などもありえない。一般的観念とかいわれるものは名目であり、「単なる言葉」(flatus vocis 音声の流れ)にすぎない。そして一般的観念や概念が「単なる言葉」にすぎぬ以上、それらが実在的(真)であるか虚構的(偽)であるかといった認識論の問題は問いとして最初から成り立

ちえないのである。

極端な実在論と唯名論との中間のところに、その折衷論として、概念論が位置している。普通、その代表としてベトルス・アペラルドゥスの名が挙げられている。「ただし、コプルストンは彼の説を後述する「穩健な実在論」として理解している。」⁽⁹⁾ 概念論はおおよそつぎのように要約できよう。われわれの精神が外的に経験するのは特殊な個別的事物だけであるが、比較抽象によつてその経験から一般的な概念がえられる。いいかえれば、特殊な個物の漠然とした複合的映像として一般的普遍的概念なる精神内的存在物が獲得される。だからして、普遍者は精神の外部には実在しないが、その内部には実在する。

こうした概念論にたいするバースの態度は冷淡の一語につきる。彼によれば、普遍者論争の問題の本質上、その答はイエスかノーのいずれかでしかありえないのに、概念論者は問題の焦点を曖昧にし、思想を混乱に陥れている。問題は概念や知識といった精神内の普遍者が精神の外部になにか対応するものをもつかどうかである以上、概念論などは、結局のところ、一般的概念などは実在的でないといっているにすぎず、したがって、本質的には唯名論と同じ所に他ならないのである。

もうひとつの立場はバースが支持した穩健な実在論である。これは「スコラの実在論 (scholastic realism)」である。この学説は東方アラビア最大の哲学者でありアリストテレス主義者であった、アヴィケンナ (イブン・スィナー) に由来し、アルベルトゥス・マグヌス、トマス・アクィナス、ドゥンズ・スコトゥス等によつて発展させられた。バースは、ラッセルの発言からも明らかなように、そのうち特にドゥンズ・スコトゥスの理論を支持し、批判的に発展させていくことになる。穩健な実在論はアヴィケンナの影響を受けたその当然の結果として、アリストテレス主義の系譜に属している。したがって、前述のごとく、バースがアリストテレスを尊敬し、プラトンに好意を寄せなかったのもこれまた当然といえよう。

さて、E・C・ムーアはスコラ的實在論の主張をつぎのように要約している。「すべての知識は概念から成り立っている。これらの概念が實在のうちに見出しうるあるものと対応していれば、それらは眞実であり、人間の知識は事実に基礎を置いている。もしそれらの概念が實在におけるいかなるものとも対応しなければ、それらは眞実でなく、人間の知識は人間自身の想像から生まれた単なる虚構にすぎない。」⁽⁹⁾スコラ的實在論者の見解では、具体的現實的存者はすべて個別的である。とすると、知識一般が客観性をもつためには現存する特殊な外的個別者のうちに、普遍的概念に対応するなにかが、普遍者を成立させるための基礎となるものが實在しなければならぬ。この普遍概念の基礎をなすものをスコラ的實在論者たちは「共通の本性(natura communis=共通の自然・共通性)」と呼んだ。そして彼らは、普遍概念が表示するこの共通な本性の實在的あり方と、その本性や本質の内容が具体的個物や認識する精神のうちにリアルにあるあり方とはまったく別のものであると考えていた。——前者のあり方を否定し、後者のあり方だけを支持すれば、勿論、實在論ではなくなり、唯名論か概念論に陥ってしまう。

トマス・アクィナスとドゥッス・スコトゥスの差異をここで詳しく論じることとはできないが、ふたりの根本的違いはつぎのようなものであると考えられる。トマスは類や種の統一性を可能にするものとして独自の実体的形相を仮定し、その形相に個別性を与えるものとして質料を考えていた。——こうした基本的な点において、トマスはアリストテレスの形而上学をほとんどそのまま踏襲していたといえるであろう。これにたいして、スコトゥスは形相を神に従属するものと見なしはするが、しかし「ドゥッス・スコトゥスは形相に、聖トマスが認めた以上に強固豊穠な現実〔實在〕性を認め」ている。⁽¹⁰⁾個物のうちには多くの形相がその構成要素として存在している。これらの形相は個物が所属する類や種の本質的特性の説明原理であり、また類や種に統一(単一)性を与える共通の本性はこれらの形相から構成されているといえよう。それと同時に、また一方、これらの形相はそれに内在するところの「個別化原理(haecceitas)」により具体的、個別的、現實的、現存的にさせられる。簡単にいえば、スコトゥスの場合、ある種に

おける具体的個物は共通な本性と個別化原理により構成されている。前者の本性により個物はその種の一成員でありうるし、後者の原理によって個物はこの個物となりうるのである。

△唯名論の支配▽

前節で概括的に説明した四つの学説のうちで、プラトンの實在論と概念論のふたつは、既述したとおり、パースにとって特に注意すべき有意義な理論ではなかった。殊更に構えて批判の対象とすべき内容の理論とは見なししていなかった。「今日なお依然として重要」な選言肢となりうるのは、残余のふたつの理論、唯名論と穩健な實在論であった。「これ以後は、便宜上、この穩健な實在論を「實在論」と記述することにする。」唯名論か實在論か、それが問題であった。パースはハムレットのごとく、ビュリダンの驢馬の窮境に落ち込むことなく、決然として實在論者という反時的立場を選じた。パースは比較的若い頃（一八七一年）、A・C・フレイザー版の『ジョージ・バークリー集』に関する書評のなかで、バークリー等の唯名論を非難し、實在論者としての自己の立場を旗幟鮮明にしている。しかもパース自身の言によれば、それよりずっと若年の頃から實在論の真理を確信し、そして、その確信は生涯揺らぐことがなかった。そのパースはこう断じている。

「オッカム主義の思想と近代科学との結合をごく自然なことであると思ひ込むくらいひどい誤解は考えられない。オッカム主義は本質的に反科学的である。自己の研究が示唆する形而上学だけを信じる科学的人間ならオッカムの觀念に敢然と反抗し、自分の純正素朴な概念に依拠するかぎりスコットゥスの意見に賛同するであらう。」(SLog)

パースは反時代的選択をしたと、わたしは書いておいた。パースの思想的状況判断はつぎのようなものであった。すなわち、近代ヨーロッパの思想「哲学」史において唯名論が圧倒的地歩を獲得し続けたことは、明白な事実であった。一四世紀前半にドゥンス・スコットゥスの学説に対抗してウィリアム・オッカムが登場し、普遍者の實在性を

否定し、やがてオッカム主義が支配的地位を確保して以来、その唯名論は強敵と呼べるような手強い相手からの挑戦を受けたことがほとんどなかった。「近代哲学はすべてオッカム主義の上に構築されている。」(50c) デカルトもライブニッツも、ロック、バークリー、ヒュームも、カントも皆唯名論者だった。——彼らのなかには、實在論的傾向も部分的に認められぬわけではなかったが、総じていえば、唯名論者だった。(例外的存在はヘーゲル位である。)しかも「唯名論者は近代哲学者だけにかぎられはしない。唯名論的世界観は、あえていえば、平均的近代人の血肉と化してしまっているのである。」(50c)

ではオッカムの唯名論が近代的な人びとの間に、比較的短期間に、広く深く根をはるにいたった理由はなにか。特に近代の哲学者や科学者が彼の理論を一方的に受容したのはなぜか。その理由をパースはつぎのごとく理解している。反宗教的・反神秘主義的傾向をもったオッカム主義者と宗教的・神秘主義的傾向の強いスコトゥス主義者の闘争の過程で、ルネッサンスの初期には、スコトゥス主義者たちの勢力がオッカム主義のそれを抑え、各地の大学の支配権をその掌中に収めていた。「彼らの学説の神学的傾向も一役買っただけのもの、なににもまして、この偶然的地位関係のために新時代の学者はスコトゥス主義者 (the Dunces) たちをとりわけて無知蒙昧な時代後れの徒輩であり、あらゆる学問、進歩、良識の仇敵とみなすようになった。主として、時代後れにたいする革新的な人びとの強い敵意がオッカム主義に彩られた形而上学に彼らを抑しやっただけであった。」(510b)

オッカム主義の勝利は世俗的勢力争いにおける政治的結託といった偶然的原因によるものであり、新時代の思想家は論争の争点を論理的に十分論議しつくした上ではなく、「最も皮相な根拠に基づいて唯名論的見解を承認したのであった。」(616b) オッカム主義のスコトゥス主義にたいする勝利やそれと科学との結びつきは偶然的なものであり、論理的必然的理由などなかったというパースの結論は、もうひとつ以下のような分析によって補強される。

ルネッサンス以降近代において、新しい多くの理論家たちがオッカム主義的唯名論を採用したのは所謂「オッカム

の剃刀”を忠実に実行したからであつた。けれどもバースにいわすれば、なるほど「オッカムの剃刀は科学的、手続的に健全な格言である」(98)とはいえ、けつして万能薬ではありえない。それゆえ、その格言の適用もときとばあに
いよつては、かえつて逆効果となり、事態を誤つた方向に導きかねない。ことに「真に實際的に重要な問題」である
ところの信念の問題のようなばあいには、「状況の論理が別の要素を考慮に入れることを断乎主張する」(98)の
である。しかし、人びとは「状況の論理」を無視し、その格言を形式的に応用することで、個物以外にも「オッカムの
剃刀」で剃り落せぬ實在的なものであることを強引に否定してしまふことになつた。かくして、現実面での偶然的事
情と理論上の形式主義的態度とが兩々相俟つて、唯名論を近代の支配的形而上学の地位に押しあげ、唯名論と科学は
不可分一体の關係にあるという誤解を生ぜしめたのであつた。

その結果は実利主義、功利主義、感覺主義、唯物主義、(狹義の)実証主義の瀾漫であり、宗教や形而上学一般の
否定であり、理論や理想の輕視であつた。そして、こうした思想的傾向が現代の生活にさまざまな不幸をもたらして
いるとバースは考へていた。現代の人間生活における悲惨な弊害はその思想的淵源をたどれば、結局普遍者論争にお
ける唯名論の擬制的勝利に由来するといえるわけである。「實在論対唯名論の問題は論理学上の専門的事柄にその
根を下ろしてはいるものの、その技業は伸び広がつてわれわれの生活にまで及んでいるのである。」(98)

△プラグマティズム▽

つぎにバースのスコラ的實在論の一部を彼の有名なもうひとつの理論であるプラグマティズム(あるいは、プラグ
マティシズム)との関連において少し論じてみることにする。

バースがドゥンス・スコトゥスの理論に決定的な意義を認め、スコトゥスから大いに影響を受けたことは明らかで
ある。しかしバースはスコトゥス主義者であつたとはいえないであらう。なぜならば、彼はスコトゥスの提起した最

も重要な観念である「個別化原理」を唯名論に導く要因としてきっぱり否定し去っているからである。したがって、パースの実在論は、ごく大まかにいえば、個別化の理論を排除したスコトゥスの実在論ということもできよう。もつとも、こうした命名も（大まかにであるとはいえ）あまり適当とはいえないであろう。というのも、ジョン・F・ボーラーによれば、パースはスコトゥスの観念をそのまま継承したりはせず、受容した観念を自己の問題解決に適するように変形してしまっているからである。⁶⁰ それはともあれ、パース自身は自己の所説にひとつの明確な名称を与え「極端なスコラ的実在論 (extreme scholastic realism)」と呼んでいる。一九〇五年にパースがイタリアのプラグマティスト、マリオ・カルデローニ (Mario Calderoni) に宛てた書翰のなかに後期における彼の基本的立場がはっきりと書き記されている。

「ドゥンス・スコトゥスが普遍者は、個体——通常の意味における、現存する事物——において個（別）性の様式に収縮されるというとき、スコトゥスですら唯名論に傾きすぎています。プラグマティシストはこの見解を承認できません。実はこの私自身も、あるダイヤモンドがなにかによって押えつけられぬばあい、それを硬いというかどうかはことばの便宜上の問題にすぎないとのべたときは、あまりにも唯名論の方向に片寄りすぎていました。現在の私ならこう主張します。実験はそのダイヤモンドが硬いことをポジティブな事実として証明するであろうと。すなわち、そのダイヤモンドが圧力に抵抗するであらうことはまごうかたなき（実在的）事実であります。つまるところそれは極端なスコラ的実在論に行きつくのであります。」(8, 208)

さて、上記の文中、自分の考えが唯名論的でありすぎたと自己批判的に書いている個所は、一九七八年の『観念を明晰にする方法』のなかで、概念の明晰な把握のための規則（後年「プラグマティズム守則 (the Pragmatic Maxim)」と称されることとなる定式）を硬さの概念に適用してみせた論証の一部を指しているのである。

パースは後年になって（一九〇年以降）、七〇年代に書いた上記の論文を「未熟な」ものと認め、そこで犯した誤

謬を訂正し、曖昧な点を明確にし、またその守則の定式が含意する内容を拡大発展させることになる。この一連の試みは上記の論文を発表した一八七八年以降になされた論理学をはじめとし、哲学・科学の諸部門における豊富な研究成果をふまえてなされたものであった。年代的にいえば、一八九三年に前述の守則の定式に付した「脚注2」にその最初の反省的考察がみられるが、しかしパースのプラグマティズムについての再検討に拍車がかかるのは、なんといつても一八九八年におけるウイリアム・ジェイムズのキヤルフォルニア大学哲学会での講演を契機に、所謂「プラグマティスト」たちが輩出し、パース自身の思想とかけ離れた諸種の所説を唱え、しかもそれらが世人に広く受け容れられる状況になってからである。この時期において、パースはジェイムズやE・C・S・シラーのプラグマティズムを痛烈に論難しながら、一方では過去の自説を批判的に検討しつつ、精力的、集中的に、自己のプラグマティズム観、つまりプラグマティズムを練りあげていく。その過程で彼が書き記した主な作品としては、一九〇二年ボードウィン（*Boardwin*）の『人哲学心理学辞典』に寄せた『プラグマティックとプラグマティズム』、一九〇三年ハーバード大学で一二回にわたって講義した『プラグマティズムについて』（ジェイムズが「暗黒の世界にひらめく輝かしい光明」⁽¹⁾と称賛したもの）、一九〇五年雑誌『モニスト』に掲載された『プラグマティズムとはなにか』（ここで「プラグマティズム」という語がはじめて登場した）、『プラマティシズムの問題点』等がある。

これらの諸論文に一貫して見られる顕著なパースの基本的姿勢は、先に引用した書翰の発言にも見られるとおり、過去の自説や他のプラグマティストたちのプラグマティズム論に含まれている唯名論的要素を徹底的に排撃し、實在論とプラグマティズムとの不可分の類縁関係を強調していることである。——實在論的性格をもったプラグマティズムというのが、勿論、パースの初めからの持論であるが、その不可分を関係がここにおいてより一層強硬に主張されているのである。「プラグマティズムは實在的一般者の存在をすでに確信していない人びとにはまずのみ込めないであらう」(5504)とまでパースはいきっている。われわれは、「プラグマティズム」の理解・解釈における意見の対

立が、現代における普遍者論争の一表現形態でありうること、そしてまた、パースのプラグマティズムの守則が觀念や概念や命題等の意味を明確に確定するための単なる論理的道具として——道具ということばから連想されるような——無色中立的な性質のものではないということをはっきり記憶しておかなければならない。實際パースのプラグマティズムは形而上学的には實在論にコミットし、「極端なスコラ的實在論」のうえに成り立っているのである。

ここで先に指摘しておいた、一八七八年の論文における問題点に立ち帰ってみることにしよう。その論文においてパースは有名なプラグマティズムの守則をつぎのように定式化している。

「われわれの概念の対象にはどのようなものもろの効果が、しかも實際に関わりがあると考えられるどのような効果がある」とわれわれは考えるか、そのことをよくよく熟慮してみよ。そのとき、それらの効果についてのわれわれの概念こそはその対象についてわれわれの概念の全部である。」(p. 40)

ついで、彼はこの「守則」を硬いという概念に適用し、硬いものとは他の多くの物質によってひっ搔いても傷つけられないであろうということの意味しているといい、それに続けてこうのべている。「この性質〔硬い〕の概念の全体は、他のすべての性質のばあいと同じように、この性質がもつと考えられる諸効果のうちにある。そのテスト〔ひっ搔くこと〕が加えられないかぎり、硬いものと軟かいものとの間にいかなる差異も絶対がない。そこで、ある一個のダイヤモンドが柔らかな生綿のクッションのなかで結晶として作り出され、そしてそこに置かれたまま完全に焼きつくされてしまった、と仮定してみよう。そのばあい、そのダイヤモンドは軟らかかったというのは間違いであろうか。……このばあい、問い方を変えて、すべての硬い物体はそれに触れるまでは完全に軟らかな状態にあり、それに触れてひっ搔くにいたるまで圧力が増すのに応じてその物体の硬さも増すのだ、とわれわれにいわせたいものはなんであるのか、と問うてもよい。反省してみれば、こういういい方にはなんらの間違いもないという答が出てくることは明らかであろう。こうしたいい方は硬いと軟らかいということばに関する現今のわれわれの言語用法面での変更と

は関わりをもつが、それらのことばの意味の変化を含みはしないであろう。」(543) これと同じ趣旨の陳述は守則を「実在性」の概念に適用した個所にも現われてくる。「海底にはかずかずの寶石があり、人跡未踏の荒野にはいろいろな花が咲き等々といった命題は、圧力を加えられないときでもダイヤモンドは硬い」という命題と同様に、われわれの観念の意味に関係するよりも、われわれの言語の配列の仕方にはるかに深く関係しているのである。」(543)

これらの操作主義とも思える文章こそまさに、パースが後年になって、余りにも唯名論でありすぎたとか、實在の観念の通俗的意味に頼りすぎたとかいって、後悔の念をまじえながら幾度か厳しく批判した当のものであった。それはプラグマティズムの守則の単なる適用上の過失にとどまる性質のものではなかった。それは当の論文で表現しようとしたパースのプラグマティックな思想の真意が完全に曲解される可能性を含んでいた。パースがそこで初めて定式化してみせた所謂プラグマティズム守則なるものがそもそも難解で生硬な表現であるため、パースの意図に反した解釈を生みだす余地も多分にあつたといえよう。そして、不適切な例証がその傾向をさらに助長せしめる働きをしたといえよう。パース自身もこうした点を率直に認めている。しかし誤解は誤解であり、間違いは間違いである。彼は自分のいわんとした点が基本的に誤っているとはまったく考えなかった。それはつぎのような弁明をみても明らかである。すなわち、「実際、一八七八年の論文において、……著者〔パース〕は自ら提唱する以上のことを巧みに実践したのであつた。というのも、かのスティックな守則を、一般的観念のその一般性における対象の実在性を強調するといった意味で、このうえなく非スティックに適用したからである。」(54)

W・ジェイムズの『信じようとする意志』と『哲学的概念と実際の結果』を読んで、パースはジェイムズがプラグマティズム守則を極端に「スティック」に解釈し、人間の目的は行動にあるという立場に立っているものと判断した。前述の「脚注2」において、すでにパースはその守則をあまり個人主義の意味で解釈してはならないと強く警告していた。プラグマティズムは福音の思想と同類で、「さらばその果実によりて彼らを知るべし」という原理の適用

にすぎないし、その果実とは個人的な成果ではなく、集団的で全人類の達成する成果と解さねばならない。個々人の努力は、本人が意識しようとしまいと、すべてがそうした集団的成果に貢献しているのである。

「実際のであるということばを低俗なけちくさい意味に理解してはならない。個人の行動は手段であって、われわれの目的ではない。個人の快楽もわれわれの目的ではない。われわれはわずかに垣間見ることしかだれもできない目的のために、全員が一肌脱いで、尽力しているのである。——その目的を無数の世代が苦心して実現しようとしているのである。それでもわれわれは具体化された諸観念の発展のうちにやがて目的が存立するであらうことは知っている。」(5.403 n.2)

行動は人間の、あるいは人間の思考の目的にはなりえない。むしろ行動はその前提として目的を必要とする。そして目的は一般的性質のものであるから観念や概念や思想の意味もまた一般的のものでなくてはならない。あるいはまたこうもいえる。一般的なものは一般的なものによってしか理解(あるいは解釈)できない。特殊的、個別的なものは一般的な概念や観念の究極的な論理的釈意(*final logical interpretant*)になりえない。したがって行動は観念の意味ではありえない。なぜなら、行動は個別的なものであるのにたいし、概念や思想は一般的なものだからである。つぎの文章はジェイムズのプラグマティズムに関する意見を念頭に置きながら、パースが自分の見解の相違点を強調する意図のもとに書かれたものである。

「われわれの概念を正しく把握するためにはその概念の結末に注目しなければならぬという、この守則の精神そのものがわれわれの眼を実際の事実とは別のなにかに、すなわち、われわれの思想の真の解釈者(*interpreter*)としての一般的観念に向けさせるのであらう。」(5.3)

パースの「实际的」という概念は、一般的にいって、明確さに欠ける憾みがあるが、この文脈では個別的具体的現在のという意味で使われていることは明白である。プラグマティズム守則は行動、反応、表象、印象、感覚的経験な

ど個別的事実ではなく一般の觀念や概念や命題など思想の知的要素に関わるものである。この点においてもはやこの二人の意見の差異ははっきりしている。けれども、さらにそれに続くバースの陳述を聞けば二人の見解(あるいは、根本的精神)の懸隔の大きさがあらためて思い知らされる。バースはいう、たとえ上述の点に気付かず「守則」を適用したとしても、守則それ自体他の觀念を明晰にする方法に比してより優れた有用な規則であるゆえ、相対的に高度に明晰な思想に到達することは可能である。しかしながら、プラグマティズム守則を誠実に徹底して実行したそのあとで、「思想が注目するところの實際的諸事実が貢献できる唯一無二の究極的善は具體的合理性 (concrete reasonableness) の發展を促進せしめることであり、それゆえ、概念の意味はいかなる個別的反応のうちもありはせず、それらの反応が具體的合理性の發展に寄与する様式のうちに存するのであるということを想い起こすなら、その思想についてより一層高度な明晰さがえられるのである。」(58)

先の引用句中のわずかにしか垣間見られぬ目的とは、実は、この「具體的合理性」を意味していたのであった。われわれの行動や反応の究極的目的はこの合理性の發展にある。したがって、概念の意味はその概念が惹起する行動や反応がこの思想の究極目的の實現に寄与するかどうかという観点から判定されねばならない。この点からみて明らかに、彼のプラグマティズム守則はひとつの規範的機能を賦与されているのである。⁶²

バースのプラグマティズム守則は特殊な個別的なものではなく、一般的、普遍的なものと、それゆえ理性的、理智的なものと関わり、しかも同時に人間の究極的目的(具體的合理性の發展)とも不可分の結びついている。そもそもバースが自己の理論にたいし「プラグマティズム」なる名称を与えた当初から、バースはこの点をかなり明瞭に把握していたように思われる。「プラグマティズムとはなにか」において、彼はその名称の誕生した経緯を説明し、それがカントの「プラグマティッシュ」の概念に由来すると明言したあとで、こう語っている。「さてこの新しい理論の最も著しい特徴は、理性的な認識と理性的な目的とが分かちがたく結びついているということを認識している点

にあった。まさにこの考慮こそ、プラグマティズムという名称を選ばせる決め手になったのである。」(54頁)人間の思想の目的が行動やそれから結果する感覚的経験に限られるとしたら、理性とはなんとみすばらしいものであるうことか。パースの合理主義はこうした狭隘な貧しい内容しかもたぬ理性の概念をとては認しえなかった。パースと他のプラグマティズムたちとプラグマティズムについての意見の相違は、根本的には、彼らの理性概念の内容の差異に帰因しているといっても過言ではない。

ところで、W・ジェイムズのプラグマティズムにたいするパースの批判を書いたついでに、もうひとつ、パースと他のプラグマティストたちとの間にみられる興味ある対照を簡単にのべておこうと思う。それはプラグマティズムそのものにたいする態度、取り組み方、あるいは思い入れの相違とでもいえようか。パースはプラグマティズムをきわめてクールに受け止めていた。彼にとってそれはあくまでも哲学的反省のためのひとつの方法であった。それは哲学ばかりでなく科学の諸部門に通用する「素晴らしく有効な道具」であるとパースは自画自賛している。しかし方法は方法以上のなものでもなく、しかもプラグマティズムなる方法は(どれほど有効であろうと)ひとつの方法にすぎぬことを片時も忘れなかった。すべての理論は間違いを含み、方法は欠陥をもっていると考えられる。したがって、理論家、思想家には、最小限必要な基本的モラルのひとつとして、「可謬主義(Callibism)」の謙虚な態度が要求される。ひとりよがりの思い上がりや、情緒的思い入れを含む熱狂や、陽気に浮ついた楽天主義は本来哲学とは無縁な態度であろう。それにもかかわらず、多くのプラグマティストたちの間にはそうした傾向がかなり顕著に認められた。少なくとも、パースはそうに感じ取っていたようである。一九〇三年のハーバート大学での連続講演の冒頭でパースはこの点に言及し、皮肉まじりの口調でそうした精神的傾向を叱責している。

「新進のプラグマティストたちにおいて際立つてゐる点は垢抜けした、生々活刺たる具象的表現様式となんとなく浮ついた調子との結合である。彼らはまるで形而上学のいっさいの秘密を解き明かす親かぎをわがものにしていてとて

も思っているかのようにみえる。」(5.17)

さらにはまた、「わたしはプラグマティズムを思弁哲学の崇高な原理ではなく、単なる論理学的守則であるとしている」(5.18)点を彼らはパースのひとつの欠点であると考えているようだと忖度している。しかし、パースにいわすれば、プラグマティズムが形而上学的難問のいっさいを解決する唯一の方法であるとか、哲学の高邁は第一原理であるとか、あるいは「世界観」(F・C・S・シラー)であるとかいうのは途方もない極論であった。プラグマティズムは批判的討議を通じて今後は正されつつ発展させられるべき方法であり、理論である。そうした理論をまるで信仰の対象となる深遠な教義でもあるかのごとく、唯一最終の哲学的結論でもあるかのごとく熱狂的に担ぎあげるのは、プラグマティズムを深化させるよりむしろ空洞化させることになる、とパースは感じたはずである。しかし多くのプラグマティストたちはこうした洞察に欠けていた。かくして、プラグマティズムにたいする態度、取り組み方、感じ取り方という点からして、その両者の間には当初より大きな開きがあったのである。そうした独善的で楽天的な「新進のプラグマティスト」たちにたいし、パースは逆説的に冷たくこういい放っている。「深化するためには、鈍重になることが必要である。」(5.17)

△プラグマティズム▽

さて上述のテストされなかったダイヤモンドに関する議論において、後年のパースが誤りであったと考えた点はなんであったのか。一口でいえば、それは事例として一個のダイヤモンドを採りあげたにもかかわらず、その論述自体が個別的な独立した事実や実験的現象そのものを扱っているかのごとき印象を与えた点にあるといえよう。なかで圧迫を加えるというテストを実施する前に燃えつきてしまったそのダイヤは本当に硬かったのか。「それを硬かった、と決定するためのいかなる識別可能な現実的事実」もない。(5.45)したがって、そのダイヤは硬かったといおうと軟

らからだったといおうと、それはことばの使い方あるいは「命名法」の問題にすぎないのである。この点に関して、パースは初期の論文が誤っていたとは考えない。難点(つまりパースが見落していた点)はその後のところにあった。そのダイヤが本当に硬かったかどうかということは、単なる言語用法上の事柄にとどまるものでなく、実は、分類にまで関わる問題であった。そして「分類は真か偽かのいずれかであり、またその分類が指示する一般者は前者のばあいには実在的であり、後者のばあいには虚構である。」(545) われわれが「ダイヤモンドの硬さ」を考えるときには、いってみれば、「ダイヤモンドの硬さ」を考えると同時に「ダイヤモンドの硬さ」をも併せ考えないわけにはいかなのである。「そのダイヤモンドの状態は独立した一個の事実ではないことを忘れてはならない。そんなものはひとつもありはしない。独立した事実は実在的でありえないだろう。そうした事実は自然の統一的事実の、抽象されるが本来切り離しえない一部分である。ダイヤモンドである以上、それは純粋な炭素の固りであったし、多少とも透明な結晶体」であり、非融解性や高度な屈折率や比較的重い重量等々の性質を持ち合わせていたはずであり、「これらの特性から硬さを切り離すことはできない」のである。(545)

ダイヤモンドにおいて、その硬さはダイヤモンドの他の特性と切離しえない関係を保っている。いいかえれば、「ダイヤモンドたること」は硬さをはじめダイヤモンドに特有な諸性質の相互関係の複合性で成り立っている。だとすると、圧迫されぬうちに燃えてしまったダイヤモンドのばあいでも、実際、そのダイヤモンドの硬さを確認するために考慮すべき事柄は沢山あったわけである。例えば、ダイヤモンドがA、B、C、D、Eなる特性をもっているとし、当のダイヤモンドがA、B、C、Dなる性質をもっていたとすれば、それがEの性質をもっていたということは十分に考えられることである。もしもテストができたならそのダイヤモンドの硬さが実在的であったことは疑いえない状態にありながら、例えば、火事の発生といった偶然事のためにテストできなかったということとその実在性を否定してしまうとしたら、それこそ不合理というものではなからうか。

ダイヤモンドにおけるそのような諸特性の關係に注目すれば、つぎのようにいえることも明らかである。もしも、直接的間接的いずれを問わず、そのダイヤモンドの硬さを認知できるようなテストが全然行われず、したがって、そのダイヤモンドがいかなる「考えられうる (conceivable) 實際的結果」ももたないとすれば、そのダイヤモンドが硬いとか軟らかいとか語ることはまったく無意味なことである。パースは無論当初からこのように理解していた。彼が初期の論文で明確にしなかった点は、ある一個のダイヤモンドをひとつの例として選んで語るといふ方法の背景にはダイヤモンドに関する一般的法則的認識が存在するということだったように思う。プラグマティズムにおいて、「問題となるのは生起した事柄ではなくて」、生起するであらう (would) 事柄であった。しかし、パースは「生起した事柄」が「生起するであらう、事柄」のひとつであるということとを判然とさせておかなかった。初期の論文を書いた頃のパースはこの「であらう (would-be) こと」ないしは「可能性 (potentially または possibility) の理論的理解」があまり進んでいなかったところにその原因があったように思われる。少くとも、「であらうこと」や「可能性」が、後年のパースにみられるように、プラグマティズムの要諦をなすという認識はまずなかったといえる。「すべての命題の理性的意味は未来のうちに存する。」(S. 45) すなわち、概念や命題の意味は実験的結果の未来における実現化への期待または予測のうちに存する。したがって、プラグマティズムには「實在的未確定状態 (vague)」、なかなか實在的可能性が存在するという承認をかならず伴っているのである。」(S. 453) こうした可能性 (正確にいえば、可能性の全部ではなく、その一部) の實在性の認識とその強調——パースのいう「スコラ的實在論」のひとつの基本的特色——は、「關係の論理学」や範疇論 (「現象学」) の多年にわたる研究を踏まえることによってはじめて可能になったのであった。

パースは、一九〇三年のハーバード大学での連続講演の最後の締めくくりの個所で、プラグマティズムの果たすべき機能、または達成すべき目的をふたつ指摘している。

「プラグマティズムにたいして果たすべきだと正当に要求しうる機能はふたつある。……すなわち、第一にそれは、本質的に不明瞭なあらゆる観念をわれわれ〔の脳裏〕から除去すべきである。第二にそれは、本質的には明晰だが、多かれ少かれ理解しにくい観念をはっきりさせるための支えとなり、助けとなるべきである。ことにそれは第三性の要素にたいし得心のいく態度をとるべきである。」(5, 206)

これによって、パースのプラグマティズムは消極的と積極的とのふたつの機能ないし目的をもっていたことが判明する。前者の消極的な側面、つまり概念や用語を明晰にし、そうすることで形而上学その他の学問における無用で空虚な論争を終息させることは初期の論文において強く主張されていた点であった。これと対照的に、後期のパースは後者の積極的側面を強く訴えるようになる。その講演を行った当時のパースは、その前者の目的はかなり達成され、その意味ではプラグマティズムは相当の成功を収めたと状況判断していた。しかし彼にとり、そうした成功はあくまでも予備的消極的なものにすぎなかった。プラグマティズムにはさらに積極的で本格的仕事が残されていた。理解することは困難だが空疎な仮構物ではないところの、第三の範疇に属する一般的概念、とくに能動性をもった法則や理性を、宇宙の理性的実態を説明するために力を借すこと、これがプラグマティズムの主たる使命であった。パースが唯名論者だとして反駁した、他のプラグマティストたちはプラグマティズムをその消極面でしか捉えず、その積極的意味を理解できなかった。それゆえまた、彼らは内実において未熟なプラグマティズムを究極的な「思弁哲学の崇高な原理」として、「世界観」として提示することができたのであった。その講演の後で、パースが自己の理論を彼らと区別するために「プラグマティズム」と命名し直す理由も実はその点にあったのである。

以上論述してきたことは、いうまでもないが、パースの「スコラ的実在論」やそれを支持するプラグマティズムの理論のほんのとは口のところでの、予備的考察にすぎない。その理論をさらに理論的に解明していく段階で、つぎに重要な課題となるのは、彼の範疇論と論理学的理論である。先にも示唆したとおり、それらの理解を土台にするこ

とではじめて、われわれは彼の「守則」の正確な理解が可能となり、同時にまた「普遍者論争」の闘技場に深く踏み込んでいけるようになるであらう。

〈むすび〉

パースが強力に主張し、擁護したスコラの実在論は、その源を質せば、彼の科学的法則についての素朴な確信、科学的法則の唯名論的解釈にたいする素朴な疑問から生まれたものであった。法則は人間の精神が作り出したものではなく、人間の精神を含めた世界や宇宙の構成要素として実在している、と彼は確信していた。こうした信念がいつ頃からパースの胸裡に定着するようになったかは定かではない。しかし、それがパースの実生活上の体験に根ざした信念であったことは確かである。なぜならば、「六才のときから壮年期をずっとすぎる頃まで実験室で暮らしてきた」(541)と回顧して語っているように、パースは若年時から自然科学に親しみ、また青年・壮年期のほとんどを自然科学における専門の研究者として過ごしているからである。こう書いたからといって、それは科学者であれば、科学の実践を積み、だれもが法則の実在的力を確信し、實在論的立場を採用するようになる、ということの意味しているわけでは勿論ない。現に、パースとはほぼ同時代の高名な科学者、E・マッハ、H・ポアンカレなどの法則や科学そのものにたいする理解は、根本的な点で、パースのそれと著しく異なっていた。科学は自然や世界に関する確実な知識、真理を絶対に獲得できず、自然のうちにいかなる対応物をもたぬ仮説を感覚与件から構成し、その含意関係を明らかにし、後の与件の発見に備えうるだけであるとか、科学の法則は便宜的に採用される「規約」にすぎぬとか、自然法則は感覚印象を組織するため、精神の賦与する秩序に従って作りだされた仮構物にすぎぬ、とかいったポアンカレやマッハ流の理解の仕方の方が現代では、大勢としてむしろ受け入れられやすいのである。——実証主義の流行をみよ。

勿論、実証主義の理論を全面的に否定するのは愚かなことである。マッハやボアンカレーの理論にも傾聴に価する所見は数多く含まれている。それにまた、実証主義者が意図した点、すなわち、科学（学問）を過去の（近代の）形而上学の桎梏から、あるいは古い哲学的解釈から解放しようとする論点はそれ自体まったく正しかったのである。「過去の誤りを回想して人間は次第に用心深くなったから、次第に多く観察し、次第に少ししか一般化しなくなった。一つ一つの世紀でその前の世紀をあざ笑い、一般化を余りに早急に余りに幼稚に行なったことを責めた。デカルトはイオニア人を憐れんだが、デカルトは我々の微笑を招くまわり合わせとなる。」とボアンカレーはのべている。

その過去の反省において、その用心において実証主義者の態度は正当であつた。しかし、「次第に少ししか一般化しなくなった」という精神的傾向が、根本的になにを意味しているのかといった点まで彼らの反省は及んでいなかったように思える。パース流の視点からみれば、科学と唯名論との関係にまで疑いの眼は向けられずに終ってしまったといえよう。ボアンカレーやマッハの科学についての実証主義的解釈の試みは科学と唯名論との間に存するものもろもの夾雑物を除去することで、両者の関係をより緊密にし、一層深化するものであつた。自明の前提としての唯名論の原理により一層整合するように科学を認識、理解し直すことは、科学の発展を約束するものであると彼らは感じていた——意識的ではなくとも——ようである。前にのべたごとく、パースはこれを科学そのものをますます危機に陥れる試みであると考えた。この双方の見透しのうちに対照的にみられる楽観主義と悲観主義は、すでに明らかとなっており、科学と唯名論との関係を自明の理として容認するかどうかに由来している。少し大雑把ないい方をすれば、実証主義者はその原理に依拠して科学を記述し、提示すればよかったのにたいし、パースはその原理を承認できなかったため、科学を説明し、証明しなければならなかつたのである。

科学、科学的法則、科学的概念、科学の方法の實在論的理解のため、パースは過去の、及び同時代の哲学者、科学者の意見を広く尋ね、それらの理論を深く研究するのに超人的努力を払つた。その間に彼は、自己の不動の確信だっ

た法則の実在性の信念を確認するためのひとつの基本的な理論的わく組をドゥッンス・スコトゥスの理論のうちに見出した。そして、スコトゥスの意見を当初の手懸りにしつつ、現代的なスコラの実在論を構築しようと努めたのであった。

注

- (1) J. K. Feibleman, *An Introduction to the Philosophy of Charles S. Peirce* (The M. I. T. Press)
 - (2) *ibid.*, p. XV
 - (3) エディンブラス・シルソン『中世哲学史』(ヘンデルレ書店) 一九頁以下参照
 - (4) 同右、二二五頁
 - (5) *Collected Papers of Charles Sanders Peirce* (Harvard University Press), vol. I, par. 27, note の略号。以下同様。
 - (6) シルソン、前出、五三頁
 - (7) エドムスタン『中世の哲学』(慶応通信) 四二―四三頁参照
 - (8) Edward C. Moore, *American Pragmatism—Peirce, James, and Dewey* (Columbia University Press), p. 27
 - (9) シルソン、前出、三三六頁
 - (10) John F. Boler, *Charles Peirce and Scholastic Realism* (University of Washington Press), p. 38
 - (11) W・シヤームズ『ブラザーテイムズ』(岩波文庫) 一〇頁
 - (12) Vincent G. Potter, S. J., *Charles S. Peirce—On Norms & Ideals* (The University of Massachusetts Press), p. 54
- 参照
- (13) ボアンカレ『科学と仮説』(岩波文庫) 一七〇頁